

幕末明治の写真師列伝 第八十七回 宮下欽 その九

妙見を守備していた官軍は同盟軍の激しい攻撃を支えきれず、ついに妙見を奪回されて撤退する。一方、同盟軍の山道隊は東金倉山よりさらに山中を進んで、石坂山より榎峠に隣接する朝日山の官軍監視兵を攻撃、これを駆逐して朝日山を占領した。これにより11日未明には、尾州藩、上田藩の榎峠守備隊（二小隊）は、同盟軍に完全に包囲されることとなった。また同盟軍の後続の会津藩、桑名藩の兵もこれに合流したため、榎峠付近の峰々はことごとく同盟軍により占領されてしまう。このため、榎峠及びその付近にいた少数の兵は、白岩瀬の渡山頭へ撤退する。

翌11日、ようやく減水していた信濃川を渡って官軍の応援部隊（尾張藩二小隊、松代藩一小隊、薩摩藩一小隊）が、尾州藩、上田藩の榎峠守備隊（二小隊）に合流する。これにより再び激しい攻防戦となった。

12日、信濃川の対岸、三仏生村の本営にいた参謀・山縣狂介（後の山縣有朋）は、同じ長州藩奇兵隊出身の時山直八に榎峠にある朝日山堡壘の奪取を命じる。

翌13日早朝、時山は200の兵を率いて朝日山堡壘に突入したが、この堡壘を守備していた同盟軍の安田隊、会津藩の萱野隊、桑名藩の雷人隊に阻まれて成功せず、ついに時山自身もこの時の戦いで戦死してしまった。この知らせを聞いた山縣は時山の才を惜しんで落胆したという。

同じ13日、小千谷より松代藩参謀・高野広馬が三仏生村に来て、三仏生、高梨の部隊を指揮して妙見攻撃の指揮をとることとなった。これにより松代藩の五番狙撃隊、二番小隊が高梨の河岸に進出して妙見にいる敵を攻撃する。この攻撃によりついに敵も大砲、弾薬を放棄して敗走した。

14日、松代藩の五番大砲隊は榎峠の山麓に出て、砲戦に参加する。敵もこの砲戦に応じて19日まで、昼夜砲戦が絶えず激戦となった。松代藩兵は各所で一小隊ずつ他の隊と共に勇敢に戦っていたが、この戦いで何人も犠牲者が出た。榎峠の勝敗が容易に決しないことから、山縣、黒田の両参謀は、関原にいた長州藩三好軍太郎の監軍に同意を求めて、直接、長岡を攻撃して、この局面を変える方策を決めた。

これにより16日、薩摩藩、長州藩の軍は本王島と楨下を攻略した。続いて与板に進撃し、これにより勤皇派の与板藩と連携できるようになった。与板藩（井伊家二万石）は大政奉還後、井伊家宗家の彦根藩が譜代筆頭にも関わらず新政府側に藩論を転向させたことから、支藩である与板藩もそれに従った。近隣の諸藩は佐幕色を強めて新政府軍と戦ったが、与板藩は前記の事情から新政府軍側に就く構図となり、孤立した存在となっていたのである。この時、長岡藩をはじめとした同盟軍主力部隊は榎峠等の守備に回っており、長岡城下はがら空きの状態だった。そこで与板藩の御用商人による船の援助を受けて増水の信濃川を渡河し、長岡城下への奇襲攻撃をかけることにする。

19日払暁、長州藩監軍三好軍太郎は長州藩兵を率いて、本王島より信濃川を渡って長岡城下の寺島、草生津方面に上陸する。その後、長岡藩兵の抵抗を排除しつつ、長岡城下へ進軍していった。この大軍に長岡藩兵は抗することもできず退却して、長岡城下に向けて後退していった。

一方、薩摩藩の大部隊も楨下より信濃川を渡って蔵王に進出し、長岡城下の神田口、内川口、渡里町口の三方より長岡城の大手口を目指して進軍する。これに対して長岡軍の城将・河井継之助は直ちにガットリング砲を内川橋に据え付けさせて防戦に努めるも、ついに砲を放棄して撤退していった。奇襲攻撃を受けて長岡城内に撤退した長岡軍はついに自ら城に火を放ち、敗走の際には長岡市中にも放火したため、長岡はこれにより落城となる。

関原にいた長州藩三好軍太郎の山道軍も軍を進めて、榎峠、朝日山、妙見にいる味方を応援する。同盟軍の方は長岡城が攻撃を受けたことを聞き、その一部を残して長岡へ急行する。これによりこの付近の同盟軍は手薄となり、新政府軍は直ちに全力で攻撃してこれを敗退させた。長州藩三好軍太郎の山道軍も軍を進めて、ついに長岡城を占領する。長岡軍は遠く栃尾方面に撤退していった。

19日、征討軍先鋒の本営をこの長岡城に移す。松代藩は五番小隊が長岡城に入り、二番小隊、五番狙撃隊は妙見より六日町に到りここに滞陣してこの地の守備に就いた。一番小隊、四番小隊、六番狙撃隊、八番大砲隊は小出島より長岡北方六十里の葦嶺の警備に就く。総括隊長の河原左京は諸隊と共に長岡城下に進撃して、石打極楽寺に本営を置き、その地の守備に就く。高梨、浦村にいた松代藩兵の全部隊もこれに同行した。

長岡藩主、牧野忠訓、忠恭などの一族は、初めは難を避けて長岡東方にある栖吉村の普濟寺に避難していたが、長岡落城により森立峠を越えて栃尾に到り、翌20日、さらにそこから八十里越の国境を越えて会津藩領の只見に入り、ここで一行80名内、60名を再び長岡本隊に返した。その後、会津若松を目指して行くことになった。

長岡藩兵もその多くが森立峠を越えて栃尾に敗走し、榎峠にいた長岡軍の精兵も一旦、長岡城に入城するも征討軍に抵抗できずに村松村、半蔵金村を経て栃尾の東方三里の地にある葎谷（むぐらたに）に後退した。この地にはすでに長岡勢の多くが集結していた。会津藩の主力は六日町に集結して、20日は半蔵金村に宿営し、翌21日には栃尾に到着した。桑名藩兵も同様に21日には栃尾に到着している。衝鋒隊は金毘羅山を越えて半蔵金村に出て、これも21日には栃尾に到着している。

5月21日、征討軍は主力をもって森立峠、浦瀬、見附、今町のラインを占領して、ここに部隊を配置し、同盟軍の反撃を阻止することにした。またその一部は栃尾、文納、与板、出雲崎の線を第一線陣地として、守備することとなった。長岡軍の河井継之助は栃尾、葎谷にいた諸隊を率いて、21日に加茂に移動して兵を休ませた後、応援の米沢藩兵500名の到着を待ち、ここで同盟軍の今後の戦略会議を開いた。その主眼は長岡奪還の作戦であった。

その概要は、

- ①征討軍の兵力の両翼を攻撃して牽制する。
- ②この間隙を利用して、中央突破を計り、今町に突入する。
- ③今町の征討軍の仮本営を撃破して征討軍に動揺を与える。といったものであった。

（森重和雄）